

初期シェリングのプラトン研究

Platon kantianisieren oder Kant platonisieren?(1)¹⁾

浅沼 光樹

シェリング研究の現在

1

ミュンヘンのバイエルン科学アカデミー内に設置された「Schelling-Kommission」によって、シェリングの初めての本格的な全集である『歴史批判版全集』が企画され、その刊行が始まったのは、18年前（1976年）のことであった。その間、この『全集』に関しては、我が国でも二度にわたってそのつどきわめて詳細な報告がおこなわれ、それらはいまでも容易に参照できる²⁾。それゆえ、改めてここでその内容を繰り返す必要はないであろう。付け加えるべきことがまだ他に何かあるとすれば、四つの系列(Reihe)から構成されるこの『全集』は途中、編集方針に若干の変更が加えられはしたものの、その後、第一系列（既刊著作）に関しては、第七巻まで（ただし、補巻一巻が別に刊行されている）が、第三系列（書簡）に関しては、第一巻が刊行されているが、それ以外の系列 第二系列（遺稿）と第四系列（聴講者による講義の筆記ノート）に関しては未刊行である、ということである。

しかしこうしたことを改めて耳にすると、ひとは そのひとが他の哲学者の『歴史批判版全集』の刊行状況（例えば、同じドイツにおけるヘーゲルやフィヒテなどのそれ）について何も知らないわけではないならば尚のこと 今さらながらその刊行ペースの遅さに驚きを禁じえないかもしれない。なんと言っても、われわれは 実際の年月の二倍ちかい時間を費やして ようやくイエーナ期のシェリングにまでたどりついたにすぎないのであるから。もちろん、いったい何が原因となつてこうした事態が出来するにいたつたのか、と問われるならば、そのような問いに対しては、即座に次のように答えることができる。すなわち、

それは端的に言って、シェリングに対する本格的な取り組みがこれまでなされてこなかったからであり、それに反して、初の本格的な全集に、他に類例を見ないほどの高い学問的な水準が求められているからである、と³⁾。

まさしく、その通りなのである。したがって、この地点にとどまる限り、とりたてて論ずべき事柄があるとは、われわれは考えない。けれども、この限界を踏み越えてゆこうとすると、つまり、今述べた二つの理由のために『全集』刊行の遅延が生じているというのが、たしかに事実であるとしても、さらにこの事実をどのように受け止めるかという段になると、話は違ってくる。例えば、この事実を前にして、それがシェリング研究の停滞を意味していると、たとえ漠然とであれ思い描かれるとするならば、どうであろうか。もっとも、こうした考えを抱くひとにそれが誤解であることを納得させるのはたやすいことだとは言えないかもしれない。というのも、そのためにはシェリング研究の現状を外側からではなく、幾分なりともその内側から眺める視点が必要とされるからである。

2

しかしながら、シェリング研究の現状を外側からではなく、その内側から理解する、というのは、それをその産み出された成果に即してではなく、それを産み出す活動に即して捉える、ということであり、したがってまた、それを可能となしうる視座をみずからのうちに確保し、さらにはそこへとみずからを置き入れる、ということに他ならない。だが、そのような企ては、この現実の活動のなかに実際に身を投じ、それにじかに触れ、そこに息づいているものを肌で感じとる、ということによってこそ、もっともよく達成されうるのではあるまいか。では、そうするといったい何が見えて（あるいはむしろ感じられて）くる、というのだろうか。

『全集』の刊行という事業は決して単にそれだけで孤立しているのではない。まずそれは、その他の事業と、つまり、国際シェリング協会によって、あるいは他のシェリング研究の主要機関によって、頻繁に開催されている「Tag«をはじめとするさまざまな学会やシンポジウムなどの企画と連動し合っている。そればかりではない。それに比較す

れば、あまり多くのひとの目に触れるとはいえない、シェリング研究の中心地と目されているドイツもしくはその周辺の主要大学における研究者による 個別の、あるいは集団での 日常的な研究活動をもそこには共に含めて考えられなければならない。もっとも、これらがすべて連動し合っているとはいっても、そこにあるのは緻密に組織化された一貫性なのではない。むしろそれを裏切るようなもの、無関連なもの、不整合なものが数多く入り混じっている。にもかかわらず、それらすべてのものに『全集』の刊行という大事業が何らかのかたちで影を落としており、そのためにあたかもそれが他の一切の事業を牽引していく役割を担っているかのように感じられるのである。

だからといって、『全集』の刊行という事業にそれ以外の事業が単純に従属しているのでもない。むしろ、今述べたような意味で互いに連動し合っているすべてのものの根底には、それ自体としては明確な形態をもたない何ものかがある。そして前者は後者の表現であり、『全集』刊行ですらも、その何ものかの活動の、たとえ重要ではあってもやはり一つの焦点にすぎない、と感じられるのである。このとき、われわれはシェリング研究の現状の最内奥に存するものにいわば触れる、と言いうるのかもしれない。

しかし単に触れるというにすぎない。さらに問われなければならない。この何ものかとは何か、と。つまり、それは現在のシェリング研究の数々の活動となって現れ、そこに連帯をもたらしながら、それ自身を産出し続ける主体であり、そのような意味で生命に似た何ものかであればならないのだとしても なぜなら、われわれはそれが瀕死の状態にあるのではないことを、この一つの生命の内部に漲っているエネルギーを感じるのであるから、この感じられるものはさらに概念へとたたらされるのでなければならないのである。

3

この活動の比較的中心に位置している人々は、それにいったいどのような表現を与えているのであろうか。われわれはそれを、つまり彼らを支配し、彼らの間を流れている根本気分を最もよく現しているものを、例えば Hans Jörg Sandkühler の編纂になる現時点で最も新しい概説書⁴⁾のうちに さしあたってその Zur Einführung として収められて

いる論考のタイトル（それはまた同書の中で複数の著者によって変奏されるモチーフであるのだが）として 見出す。»F.W.J. Schelling – ein Werk im Werden«という、その言葉の意味については、同書の Anhang に次のような最も簡潔な説明がある。

シェリングの著作が»生成の途上にある（im Werden）«ものと呼ばれるとき、彼の著作が決して一つの体系としてあるのではない、という事実が考慮されているにすぎないのではない。»シェリングの全貌（der ganze Schelling）«が初めて明らかになるのは『歴史批判版全集』（AA [=Akademie-Ausgabe]）が完結した後であろう、という事情も考慮されているのである⁵⁾。

まずは»ein Werk im Werden«という言葉の基本的な（いわば最初にして、最も外枠の）意味として、この引用の後半がふまえられている必要がある。しかし、『全集』の編纂の進展にともなってシェリングの全貌がしだいに明らかにされつつある、そのような状況のうちにわれわれが置かれている、ということが、この言葉の、当座の意味であるとしても、それだけではあの、われわれの身内を流れる生命が表現し尽くされているとは考えられない。なぜなら、シェリングの全体像の生成は、それだけでは単にわれわれにとって外的な事柄にとどまるかもしれないだからである。それゆえ、そこには同時に、Sandkühler の次の言葉も考え合わせられている必要がある。

シェリングは哲学上の同時代人であり、彼の思索は aktuell である。このことは次の事実によって明らかである。まずは、歴史的 = 文献学的研究が集中的に行われ、それが進展しつつある、という事実によって。『歴史批判版全集』のために、あるいは、遺稿として残された著作の、ないしは彼の講義の聴講ノートの編纂のために幾多の労力が費やされ、それが豊かな実を結んでいる、という事実によって。彼の著作に捧げられた公刊物の数が急速に増大しつつある、という事実によって。しかし単にそれだけではない。何よりも、例えば、自然哲学や神話の理論や宗教哲学などの今日の議論においてシェリングの諸理念が既に獲得している意義もまた、それを証明す

るものなのである⁶⁾。

しかしまだ不明瞭かもしれない。ここにあげられている最初の二つの事実と第三の事実との連関が、さらにはそれらの事実を引き合いに出して、だからこそシェリングがわれわれにとって「哲学上の同時代人であり、彼の思索は aktuell である」と言われる、その脈絡が明瞭ではなく、その間になにがしかの飛躍があるように感じられるからである。両者を媒介するものは何なのか。

何ものかがわれわれにとって哲学的に aktuell であるとか、誰かがわれわれにとって哲学上の同時代人である、というためには、その何ものかのために、あるいはその人物のために、まずはわれわれ自身が問題と化して、一つの生成 Werden の内に引き込まれる、というのでなければならぬのではないか。つまり、Sandkühler の指摘する事実のために、「シェリングは哲学上の同時代人であり、彼の思索は aktuell である」と言われなければならない、とするならば、これらの事実はその核心部分において、同時にわれわれ自身の生成という意味をもっていなければならないのではないか。畢竟、シェリングの全体像の Werden とわれわれ自身の Werden とは、そのようにして表裏一体をなしているものでなければならないのではないか。

けれども、今述べたことが真実であるかどうか、われわれはどのようにして確かめたらよいのであろうか。言うまでもなく、それは、われわれがシェリング研究の現状の内面にとどまり、それをあくまでもその内側から感じる、というだけではなく、さらにその目を自己自身に振り向けてそれを Werden を Werden のうちに Werden として凝視する、ということによってであろう。

4

そのような課題におそらく初めて直面したひとの一人として Walter E. Ehrhardt は、困惑の表情を隠さない⁷⁾。

シェリング研究の現状 (Stand) について語るという、そのような標題が与えられても、それは、私には現時点では極めて不適切なものに思われる。なぜなら、シェリング研究には、注目すべき変動

が生じているからであり、その変動はむしろほとんど根本的な変革とも言ってもよいようなものだからである。

しかし次のように　つまり、「シェリング研究の現状には、それゆえおそらく現在は、たとえきわめて性急なしかたではあっても、生成の途上にある(»en devenir« zu sein)、という述語が帰されうる。これによってしかし、シェリング研究の現状のうちに認められうる一般的傾向だけは特徴付けられているのである」と　述べ、この論考を終えるそのあいだに Ehrhardt が行っていることに目を向けるならば　たとえ彼自身はそれを反省し、明示的に述べているわけではないとしても

当分の間、繰り返しなされるであろう同種の試み(つまり、いったん白紙にかえされ、混沌状態につれもどされたシェリング像が、ふたたび形態化していきつつあるその最中であって、それ自身をふりかえってうつしとったスナップ・ショットというべきもの)が、どのような意義を持ち、またそれ自体がどのようなものでなければならぬか、ということがわかる。つまり、このようにして彼はそれをいわば実地に示している(体現している)のである。

一言で言えば、彼がそこで行っているのは、「シェリングはどのような哲学者ではないのか」ということについての了解事項を確認しようとする、という作業である。つまり、そこに見いだされるのは、シェリングが何ではないのか、ということをつたえず明確化し、それをみずから突きつけ、それに則って自己自身を撓め、矯正してく、という Ehrhardt の行っているのは、その作業の最初の一つとしてそれは理解される　不断の作業の雛形に他ならないのである。

ところが、この作業の内に、シェリングの全体像の生成が同時にわれわれ自身の生成でもある、という事態が鮮やかに描き出されている、とは言えないであろうか。というのも、われわれが真に生成のうちへと引き入れられるのは、この反省を通じてなのであって、この反省を離れては、われわれの　すなわち歴史的精神の　生成などは、どこにも存在しない、と言わなければならないからだからである。むしろ事態がそのようになっているからこそ、シェリングは、その全体像の生成を介して、われわれにとっての哲学上の同時代人となり、彼の思索がわれわれにとって aktuell となるのである。　では、この反省は Ehrhardt

において何を見出すのであるか。

5

Ehrhardt は、「かつてはそれらによってシェリング研究の現状が整理されることが多かった」のだが、「いまやその基盤を失った」「広く受け容れられている考え」（彼はそれをクリシェないしは伝説と呼ぶ）を、次のように列挙しながら、シェリング研究の現状を見極めようとする。

シェリングは初めのうちフィヒテに依存していた。シェリングの自然哲学は知識に基づかない空想的な思弁である。シェリングはヘーゲルとともにスピノザを模範としていた。シェリングは、とりわけペーメに傾倒しながら、神秘主義的伝統とカバラの暗闇のなかへその身をゆだねた。シェリングはいわゆる「啓示哲学」によって保守主義的な教義学と政治を救済しようとした。シェリングは最後に、ヘーゲル哲学との批判的対決を試みた⁸⁾。

しかし Ehrhardt によれば、これらのクリシェないし伝説の崩壊は、それを支えていた前提の、いわゆるプロテウス＝シェリングというテーゼの崩壊でもある。今やそれに 　ただし、もはや批判の対象となり得ないドグマとしてではなく、これまでの研究傾向に対する反省から生じてきた一つの対抗する方法として 　対置されるのは、Ehrhardt の言葉を用いるならば、»nur ein Schelling!«というテーゼ（というよりも、むしろ一つの目標にして課題）であり、要するに、彼の哲学の全体を一つの連続において見ようとする、そうした不断の自己試練なのである⁹⁾。

しかし、シェリング研究の現在について語る事が、そのようにして否定を連ねることにとどまるとしても、実際の Ehrhardt の企て、そのスナッフ・ショットには、いわば濃淡があることは避けられない。実際、そのなかには必ずしも共通の了解事項となっはいいないものも含まれていると言ってよいと思われる。したがってそれらのすべてに言及することは必ずしも必要ではないであろう。もっとも穏当な立場を採るならば、既に確定済みである事柄とそうでない事柄を選り分けていく基準は、やはり『全集』の刊行ペースということになる。そうすると今のところ、
と 　との間には線が引かれなければならないと考えられ、したがって

その崩壊が確実となりつつあるクリシェないし伝説としては、とが数えられうるにとどまるのである。

6

まずは に関してであるが、Ehrhardt は次のように述べている。

初期においてフィヒテに依存していたという伝説と同様に、文献状況の改善は、その間に、既に十九世紀の三十年代には登場していたクリシェを崩壊せしめた。それは、シェリングの自然哲学という途方もない企ては、自然諸科学についての無知から生まれたロマン主義者の夢想のごときのものであるというものである。そのなかでシェリングが彼の自然哲学を構想した自然諸科学のコンテキストを、『歴史批判版全集』が苦勞して、科学的に明らかにした後では、もはや誰も、シェリングが当時知られていた諸研究について不十分な知識しか有しておらず、その知識の欠落を思弁によって覆い隠したのだ、と主張したりはしないであろう。むしろ明らかにされたのは、自然に対するシェリングの関心はライプツヒ時代の研究において初めて生じたのでは決してないし、彼は、「自由の隠れた痕跡」(SW III, S. 13)を自然の存在のうちにも示そうという自己の意志の正しさが多くの実際の発見によって確証されている、と考えることができ、また、自然科学の問題設定の具体的な進歩に対して彼の哲学が影響を及ぼしうる、ということも正当な権利を持って主張することができる、ということであった。現在でも、普遍的有機体という彼の原理に対する有益な、単なる言葉の上にとどまらない類似物を示すことができたのであり、この類似物は、シェリングによって発見された解釈モデルが、今日の自然科学の問題設定において今もなお重要であり続けている、ということを際立たせたのである。

自然を自由に対立する何ものかとしてではなく、自由に根を下ろし、自由へと影響を及ぼすものとして認識する、そうした自然の概念を産み出した、シェリングの功績は、自然の生態学的な諸連関についての責任の意識が高められつつある、というコンテキストのなかで、今日改めて称揚されている (vgl. Schmied-Kowarzik 1996⁹⁾。

シェリングの自然哲学について自然科学者たちが否定的判断をくだす、というのが長い間、主流であったが、このことは辛うじて「歴史的にのみ説明さ」れうるであろう。というのも、この事実是一方では単に、自然諸科学の位置についての自己理解が変更された、ということ記録しているにすぎず、他方では、自己の方法の歴史性に関して意識が長いこと彼らには欠けていた、ということと関係しているからである¹¹⁾。

こうして第二のクリシェないし伝説の崩壊はわれわれがそこを踏査すべき新しい領域を、課題として引き渡す。要するに、第一に、われわれはわれわれがこれまで知らなかった（つまり、研究領域としては知らなかった）研究領域を見いだす。すなわち、シェリングの自然哲学的著作が、その背景をなすもの（自然科学史であり、さらにはそれを一部門として含む自然哲学史）ともども、真剣な研究対象として引き受けられることになる（その場合、さらに何故それがこれまでそのように受け止められてこなかったか、という歴史的反省も促すことになるであろう）。つまり、それをどのように評価するにしても、研究者には、十八世紀後半の自然科学の動向について、一般的知識を有していることが必須とされる。それだけではない。さらにシェリング研究者は、彼の自然哲学を彼の思想の、取り外し可能な一つのパーツとして、それを視野の外においたまま、彼の思想の全体について語ることを禁じられる。こうした態度変更、あるいは、こうした態度変更が課せられているという自覚は、前世紀末のシェリング研究者たちを、それ以前の世代から分かつメルクマールの一つとなっている、と言えるだろう。

7

では、もう一つのクリシェないし伝説の崩壊についてはどうであろうか。このように問いながら、われわれはこの論点先が先の論点に勝るとも劣らないくらい重要であることを予感する。というのも、シェリングの哲学をもはやフィヒテの初期知識学から出発し、そこから生い育ってくるものとしては理解することができない、ということは、われわれが現在手にしている哲学史の地図に決定的な誤りがあったことを意味しているからである。そのために一瞬われわれは、そのなかで道を見失うよう

に思う。そのようにして突如、自分がこれまでついぞその存在すら想像されなかった領域に、ドイツ観念論のいまだ問われざるもう一つの源泉という領域へと落ち込んでしまうことに気がつくのである。

(未完)

注

- 1) Canone の研究メンバーの一員として出張旅費の補助をうけて、筆者は、去る 2003 年 8 月の前半をミュンヘンとヴェネチアで過ごした。ミュンヘン滞在の主な目的は、バイエルン科学アカデミー内にあるシェリング・コミッションを訪問し、目下進行中の『歴史批判版シェリング全集』編纂の現場を視察することにあり、ヴェネチア滞在のそれは、国際シェリング協会の主催で毎年 1 回、ただしここ数年来はヴェネチア国際大学を会場として 1 週間の日程で開催されている夏期講習会に参加することであった。本稿には、その成果が一部、反映されている。
- 2) 大橋良介「〔書評〕アカデミー版『シェリング全集』第一巻」『哲学研究』第 535 号(京都哲学会、1978 年)。長島隆「〔研究資料〕シェリング全集の現状 ― これまでの著作集と新しい全集の現段階」『シェリング年報』創刊号(1993 年、日本シェリング協会)。
- 3) 注 2) の文献を参照。
- 4) Hans Jörg Sandkühler (Hrsg.), *F.W.J.Schelling* (Sammlung Metzler, 1998)
- 5) Ibid., Anhang, S.208
- 6) Ibid., Vorbemerkung (頁数付けなし)
- 7) Walter E. Ehrhardt, “Zum Stand der Schelling-Forschung” in *F.W.J.Schelling*
- 8) Ibid., S.40
- 9) Cf. Ehrhardt, *ibid.*, S.40. 「これらのイメージ(表象)は、シェリング著作集の形態という地盤の上に形成され、生い育ったものなのであるが、この地盤は、解釈を加えることによって、次のような諸傾向をそこから読みとることを許すものだったのである。その諸傾向は、シェリング哲学における目的の統一性を否認するまでに至り、プロテウスのないしはヤヌスのような複数の顔としてさまざまに粉飾を施されて(bildreich)特徴付けられたのである。とくに伝記的=心理学的な解釈と歴史的=社会的コンテキストが、そのように誤って想定されたシェリングの変転のために「説明」として持ち出されることもあったのである。それらが、シェリングが生前に享受した比較を絶する名声と想定される彼の教説の不統一との間の対立を説明すると考えられたわけである。」
- 10) »Von der wirklichen, von der seyenden Natur«, *Schellings Ringen um eine Naturphilosophie in Auseinandersetzung mit Kant, Fichte und*

Hegel, Schellingiana Bd.8
11) Ehrhardt, *ibid.*, S.42f.

（龍谷大学非常勤講師）